

輸入粗飼料の情勢

全酪連購買部
購買推進課

北米コンテナ船情勢

BAF（Bunker Adjustment Factor 燃料費調整係数：燃料価格変動に対して調整される割増運賃）について、多くの船会社で4-6月分は\$5の値上げが実施されました。GRI（General Rate Increase：基礎レート）については、多くの船会社で値上げ実施を発表していましたが、大半が6月以降にさらに延期となっている模様です。

先月号でもご案内の通り、産地では、西海岸港湾での労使交渉の動向が注目されています。6年ごとに更新されている北米西海岸港湾での労使協定が、14年6月で失効となることを受けて、新たな協定の締結に向けて、雇用主PMA（Pacific Marine West area：船会社やターミナル運営者で構成される使用者団体）と、労働組合ILWU（International Longshore and warehouse Union：西海岸各港の港湾労働者で構成される労働組合）が5/12より本格的な交渉を始めるとされていますが、両者の主張は大きくかい離しており、交渉が長期化するとの見方が強まっています。最悪の場合、北米西海岸の各港でストライキが起り、各港が閉鎖し、輸出入の機能が完全にストップすることも懸念されています。前々回の02年では交渉が決裂し、9月下旬から10日間も各港が閉鎖されて、輸入乾牧草についてもデリバリーが正常に回復するまで約半年を要する事態となりました。ストライキが実施されるか否か、実施されるとすればいつからか、予測はできませんが、今後の動向には十分に注意が必要です。

ビートパルプ

<米国産>

13年産の製糖作業およびビートパルプ生産は、5月下旬から6月上旬まで続く予定です。ビート大根の収穫面積およびビートパルプの生産量は、砂糖の相場価格が低調に推移していることと、作付けの遅れにより単収が減少しているため、前年よりも5%程度減少している模様です。

産地では14年産ビート大根の作付けが開始しました。輸出向けの主産地であるミネソタ州とノースダコタ州では冷涼な気候が続いていたため、作付け進捗がやや遅れているとも伝えられていますが、種子の品種改良により単収が増えることも見込まれ

ていることから、14年産ビートパルプの生産量は前年よりも増えることが一部では予想されています。しかしながら、カリフォルニア州内の旱魃（干ばつ）の影響を受けてアルファルファが高騰しているため、米国内酪農家からのビートパルプの引合いが非常に強くなっている模様です。かねてより欧州からの引合いも強いことから、ビートパルプの産地価格は堅調に推移しており、14年産に向けて動向には注意が必要です。

<中国産>

13年産ビート大根の作付面積は、前年よりも減少している模様です。国内市場の拡大が進み、国内向けの需要もさらに増えることが予想されています。そのため、韓国と日本向けへの13年産の中国産ビートパルプの輸出数量は、限定的となることが見込まれていましたが、3月は日本向けの輸入がついにゼロとなりました。今後も引き続き、タイトな状況が続くことが見込まれています。

アルファルファ

穀類など他の作物への転作もあり、西海岸全体でアルファルファの生産量は減産傾向にあり、供給数量の不足が年々不安視されるようになっていきます。

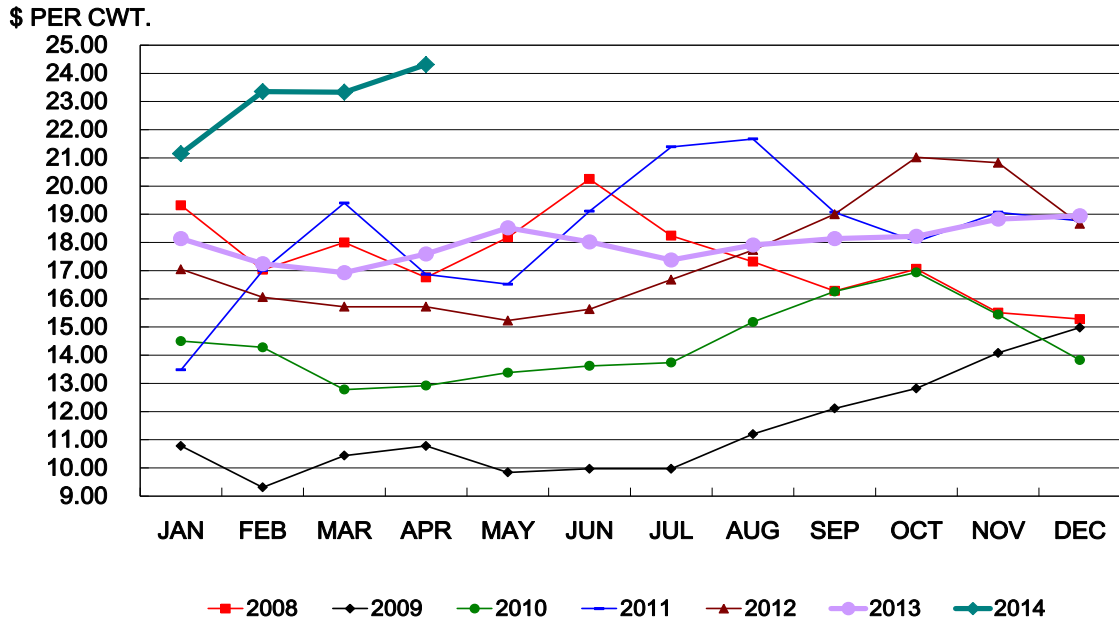
そのような状況下で、カリフォルニア州中央部およびネバダ州北西部周辺では、今冬から旱魃傾向が続いています。放牧用の牧草の生育に影響が出ており、14年産の北カリフォルニア産アルファルファの作付面積や生産量への影響も懸念されています。

一方で、米国乳価については、2月から\$23/100ポンドを超える水準で推移していましたが、4月は\$24を超えて、史上最高値（推定）を更新するまでに至っています（下表参照）。損益分岐点は\$17程度とも言われており、トウモロコシの相場価格が軟化している中で、酪農家はアルファルファを積極的に買える環境にあります。また、牛肉の相場価格も高値で推移していると伝えられており、肥育農家も乾牧草を積極的に買える環境にある模様です。

このようなことから、市場では酪農家向け、肥育農家向けともに、アルファルファが“パニック買い”となっており、13年産のわずかな残り物にも、莫大な需要が集中しているのが現状です。アルファルファの産地価格はP SW産（Pacific South West area：太平洋側南西部地区／インペリアルバレー産・北カリフォルニア産ほか）を中心に、昨年と同時期に比べて\$70/st以上も高騰して推移しています。

また、米国産アルファルファの輸出数量は、13年ではUAE（アラブ首長国連邦）向けと中国向けに次いで、日本向けは第3位となっています。米国産アルファルファの輸出向け市場の主導権は、UAEと中国の両国が握っており、輸出向けアルファルファの産地価格を下支えする強力な力を持っているのが現状です。

CLASS III MILK PRICE AT 3.5%TEST



米国乳価グラフ：クラスⅢ チーズ向け CWT（100ポンド≒45.4kg）当たり \$

- ① 西海岸全体でアルファルファの生産量が減少していること
- ② 早魃の影響で米国内の酪農家や肥育農家が“パニック買い”をしていること
- ③ 米国乳価が高騰していること（史上最高値の水準）
- ④ 輸向けはUAEや中国向けの買付けが近年旺盛なこと

以上の4点から、14年産アルファルファの産地価格は、日本向けの事情に左右されることはなく、どの産地も高値でスタートすることは間違いのないとされています。作柄が良かったとしても値上がりをし、作柄が悪ければさらにもっと高くなることも考えられています。この“パニック”がいつまで続くか、夏までに落ち着くかどうか、誰も予測はできませんが、早魃よりも、米国内（特にカリフォルニア州内）の酪農家が“いくらまでなら買えるか”が今後の産地価格のカギを握ることとなると言われています。同時期に穀物や燃料も高騰した08年産では、その後に価格急落も起きましたが（米国乳価も急落）、上記4点の通り、当時とは環境が大きく異なっているため、ますますアルファルファの価格は下がる要素がないと、現時点では考えられています。今後も動向には注意が必要です。

<ワシントン産>

主産地のコロンビアベースンでの14年産の作付面積は、前年とほぼ変わらないことが予想されています。早い圃場では5月中旬から、1番刈の収穫が始まる予定です。

カリフォルニア州内の酪農家からのアルファルファ引合いは、日々強くなってきて

いるのが現状で、14年産の1番刈も大部分は米国内の酪農家を買付ける見込みです。そのため、作柄にかかわらず、産地価格はさらに高騰することが懸念されています。



コロンビアベースン アルファルファ1番刈圃場 4/21撮影

<オレゴン産>

14年産の作付面積については、クリスマスバレー、クラマスフォールズともに、大きく変わらないと予想されています。当地でも、カリフォルニア州内の酪農家からアルファルファの引合いが、日々強くなってきている模様です。そのため、14年産は作柄にかかわらず、産地価格がさらに高騰することが懸念されています。

<北カリフォルニア産・ネバタ産>

旱魃の影響を一番受けている地域で、14年産のアルファルファについては、農業用水が不足して2番刈で終了する圃場も多く出てくるのでは、とされています。地域や郡によって状況は異なるようですが、どこまで使用できる農業用水が減るかは、不透明となっています。

北カリフォルニアでは、14年産1番刈の収穫が進んでいます。全米一の生乳生産地帯（サンホワンキンバレー）を有する地域であるため、州内の酪農家からアルファルファの引合いが非常に強く、産地価格は今年の同時期に比べて\$70/st以上も高騰して推移しています。

<インペリアルバレー産>

14年産の作付面積について、4/15時点でのエーカーレッジレポートによると、前年対比104%の138,774エーカーとなっています。産地では2番刈の収穫が間もなく終了しようとしています。カリフォルニア州内の酪農家から、とても強い需要が来ているため、産地価格は高騰して推移しており、輸出向けは手が出せない状況となっています。UAEや中国向けが、いつごろから本格的な買付けが始まるか、産地では動向が注目されています。

チモシー

＜米国産＞

14年産のワシントン産の作付面積は増えており、当初は15－20%増えるとも予想されていましたが、冬の降雪による凍結被害や、春先の強風による土砂被害により、生育がうまく進まなかった秋播きの圃場も多いため、5－10%程度の増加にとどまるのでは、と予想されています。コロンビアベースンの早い圃場では5月下旬から、エレンズバーグでは6月上旬から、1番刈の収穫が始まる予定です。

近年では、チモシーも日本向け以外に他国向けにも需要が広がっている模様で、昨年と変わらない価格帯で生産農家との契約を進めているサプライヤーも多いと言われています。そのため、14年産の米国産チモシーの価格は、作柄が良かったとしても期待以上に下がらないのでは、とも一部では予想されています。



コロンビアベースン チモシー1番刈圃場 4/21撮影

＜カナダ産＞

主産地のレスブリッジ（アルバータ州南部・灌漑地域）とクレモナ（アルバータ州中央部・非灌漑地域（ドライランド））では、近年はチモシーの作柄が悪くても生産コストに対して高く売れているため、14年産の作付面積は、ともに増えることが予想されています。

昨秋よりカナダドルが米国ドルよりも弱く推移しているため、14年産のカナダ産チモシーは米国産に比べて価格が軟化することも期待される一方で、米国産と同様に日本向け以外の他国向けにも需要が広がっている模様で、作柄が良かったとしても期待以上に下がらないのでは、とも一部では予想されています。

スーダングラス

＜インペリアルバレー産＞

昨年引き続き、デュラム小麦の相場価格が軟調に推移していることから、産地では小

麦の作付面積が減少しました。そのため、当初から見込まれていた通り、14年産もさらに早播きスーダングラスの作付面積が増える結果となりました。「早播き」の基準と考えられる4/15時点でのエーカーレッジレポートによると、前年対比116%の33,118エーカーとなっています。早い圃場では5月下旬から、1番刈の収穫が始まる予定です。

ロッキー山脈から流れるコロラド川が水源の当地では、水の不足は心配がないと言われていますが、昨年から再び検討され始めた農業用水の使用制限については、実施強化が懸念されています。一方で、水を多く使う小麦の作付面積が減少しており、農業用水が節約できるため、さらなる使用制限の強化などの大きな動きにはならないだろうという見方も一部ではされており、早播きスーダングラスの生産農家は1番刈で終了することなく、2番刈も大半が収穫するだろうとも産地では予想されています。小麦の作付面積が少ないため、小麦収穫後に播種する遅播き（アフターウィート）の作付面積が減少することは確実だと見込まれていますが、14年産スーダングラス全体の生産量は、現時点では、昨年よりも増加するという予想が、産地では大勢を占めている模様です。

<北カリフォルニア産>

早魃の影響を受けて、地域や郡によって状況は異なるようですが、どこまで使用できる農業用水が減るかは、不透明となっています。そのような不確実な状況下の圃場では、スーダングラスを作付けすることもできないため、14年産の作付面積は大きく減少することが見込まれています。しかしながら、上述の通り、主産地であるインペリアルバレーでは昨年より生産量が増加するとも予想されているため、スーダングラスの輸出向けの需給については大きな影響はないと、現時点では考えられています。

クレイングラス（クレインは全酪連の登録商標です）

インペリアルバレーでの14年産の作付面積について、4/15時点でのエーカーレッジレポートによると、前年対比103%の17,005エーカーとなっています。早い圃場では4月下旬から、1番刈りの収穫が開始しています。

6月ごろの産地価格次第では、休耕地プログラムに入れるか、あるいはアルファルファなどに転作する圃場も出てくるため、2番刈で生産を中止する生産農家も出てくる可能性があるとも伝えられていますが、輸出向けの需要を賄えるだけの生産量は十分にあると、現時点では考えられています。

ハミューダ

インペリアルバレーでの14年産の作付面積について、4/15時点でのエーカー

ツジレポートによると、前年対比94%の46,887エーカーとなっています。旱魃の影響により、カリフォルニア州内の肥育農家や酪農家からの引合いは強くなっていると伝えられています。

米国内の住宅需要（＝バミューダ種子の需要）が徐々に回復しているためか、バミューダ種子の相場価格は年々上昇しており、引続き高値で推移していると言われていいます。そのため、バミューダ種子の生産意欲は旺盛と考えられるため、14年産ではバミューダストローの生産は増えても、バミューダハイの生産量は減少することが、現時点では予想されています。

ストロー類（フェスキュー・ライグラス）

14年産の米国産（主にオレゴン産）ストロー類について、トールフェスク、ペレニアルライグラスともに、作付面積は前年よりも増加すると予想されています。近年続いた種子価格の低迷による作付面積の減少は、ようやく歯止めがかかってきたとも言われています。一方で、13年産のストロー類は韓国向けの需要が減退したことも受けて、在庫が多く残っているとも伝えられています。輸送コストもかかるため、カリフォルニア州内の肥育農家や酪農家からも引合いは強まっていないと言われていいます。そのため、14年産は産地価格次第では、種子を採った後はストローを集荷せずに、圃場に「すきこむ」生産農家が多くなることも、一部では予想されています。

豪州産オーツハイ

13年産オーツハイは、雨当たり被害が発生していますが、大半が軽い雨で済んでいることもあり、見た目がきれいなローグレード品が多く発生しています。また、どの産地も生育中にも降雨が十分にあったため、単収は例年よりも多いものの、雨に当たっていないスタックでも分析値はあまり良くない傾向となっています。そのため、ハイグレード品の発生は限定的ですが、見た目がきれいな中間グレード品やローグレード品の発生が多いことが、13年産の作柄の大きな特徴です。産地価格については、発生が限定的なハイグレード品は強含みで推移しているものの、中間グレード品からローグレード品については弱含みで推移しており、日本向けも韓国向けも、荷動きが順調であると言われていいます。

産地では、4月下旬から14年産の播種が始まっています。西豪州、南豪州、東豪州（ヴィクトリア州）の、どの産地でも降雨があったため、土壌水分は大きな問題がないと現時点では言われています。

以 上